

成果報告書

記入日 2018年 8月 28日

氏名 荒井 悠太	渡航先国名 エジプト・アラブ共和国	所属機関 カイロ大学
研究テーマ：中世におけるアラビア語歴史叙述と社会思想の体系化：イブン・ハルドゥーンの『実例』を中心に		
研究期間：2016年 9月～2018年 8月		
研究成果（概要）イブン・ハルドゥーン『実例』写本データ及び研究文献の収集と再検討から、研究史上の問題点を明らかにした。その解決に向けた展望を、史学史・政治思想史の観点から提示し、成果の一部を国際会議発表・論文のかたちで公表した。		
研究成果（詳細）		
<p>1. 研究の背景および研究構想</p> <p>14世紀の政治家・歴史家・思想家イブン・ハルドゥーン（1332-1406）は、自身の史書『実例の書』は全三部からなり、その第一部は「序説」（『歴史序説』、<i>al-Muqaddima</i>）と呼ばれる。彼はこの「序説」において、人間集団の活動の一般的原理を追求する「文明の学問」を提唱した。同時に、この原理を歴史学における史料批判の基準として理性に基づき運用することを提唱し、従来の学問体系における歴史学の位置付けを転換した。</p> <p>以上のような主張を行った彼の「序説」は19世紀以降、近代歴史学、或いは社会学の先駆として大きな関心を集めてきた一方で、実際に歴史を叙述した『実例』本編については研究の蓄積が極めて少なく、十分な評価がなされているとは言い難い状態が続いている。</p> <p>こうした研究状況に対し、筆者は「〇〇学の先駆」といった現代的関心に限定せず、前近代における歴史叙述と政治思想の展開という観点からイブン・ハルドゥーンの歴史的意義を明らかにすることを考えた。従来の「序説」偏重の研究対象を『実例』全体、さらにはイブン・ハルドゥーンの著作全体とその関連文献にまで拡大し、歴史叙述のなかに現れるムスリム史家の世界認識と理論、とりわけ彼の同時代までの政治哲学や統治論と関連付けつつ読み解くことを試みる。</p>		
<p>2. 史料調査・研究進捗</p> <p>留学期間を通じて、欧文・アラビア語の各種研究文献・刊行史料を購入した他、各研究施設を訪問して『実例の書』諸写本の閲覧と画像データ収集を行った。2017年4月、2018年2月、同年5月にはトルコ・イスタンブールに滞在して写本調査を実施した。またパリ写本研究所 (Bibliothèque Nationale de Paris) の運営するサイト Galica には同施設所蔵の写本史料をオンライン上で閲覧・DL可能なサービスがあり、これを通じて同施設の写本史料を利用した。</p> <p>留学期間を通じて閲覧・取得した主な写本史料は以下の通りである。</p> <p>（エジプト） エジプト国立図書館 Ta'rikh Ṭal'at 2106, Ta'rikh 5343, Ta'rikh 1 Shin</p>		

アズハル図書館

Ta'rikh Abāza 6729, Ta'rikh 134829, 134832

(トルコ)

スレイマニエ図書館

Damad Ibrahim Paşa 863-869, Ayasofya 3200, Atif effendi 1936, Yeni Jami 888, Esad Efendi 1899 他

トプカプ宮殿博物館附属図書館

Ahmet III 2924, Ahmet III 3042

以上のうち、Azhar, Ta'rikh 134829 及び 134832 は筆者の調査した限り先行研究において使用されたことはなく、近年になって図書館データベースに追加された新出史料と考えられる。

上記写本史料とエジプト・レバノンの各出版社から刊行された版本を併用しつつ『実例』読解を進めたが、その途中、エジプトで収集した『実例』写本とそれを基にしたと考えられる既存の刊本には夥しい脱落と誤写が存在することを確認した。『実例』精読のためにはこれらを修正・補完する必要があると判断し、トルコで取得した別系統の写本を校合して脱落・誤写箇所の特定を行った。

筆者が確認したような大量の脱落・誤写が刊本に生じた要因は現時点で完全には特定できないものの、エジプトの写本の大半がオスマン帝国期、18世紀以降の筆写であることが一因と推定される。それに対し、トルコで利用した Damad Ibrahim Paşa 写本と Ahmet III 世写本はいずれも14世紀～15世紀に筆写されたものとされ、著者であるイブン・ハルドゥーンの存命中あるいは没後間もない時期の成立と考えられる。したがってエジプトの写本よりも祖本との関係が近く、テキストの欠損も少なかったものと考えられる。

以上の成果は『東洋学報』100-2号(2018年9月)に掲載される。また脱落箇所の校訂を並行して進め、博士論文の「史料編」として公開する予定である。

併せて、『実例』と関連史資料の読解を進め、その記述からイブン・ハルドゥーン自身による歴史の認識方法と「文明の学」理論との関わりを再検討した。同様の試みは過去には「序説」のみを用いて行われてきたが、筆者は『実例』全体を用いてこれを行ったことにより、「序説」執筆以降の(=「序説」には反映されていない)イブン・ハルドゥーンの思想の発展や、その後の著述における理論の適用を具体的に捉えることが可能となった。

以上の作業により、『実例』の史料的性格を実際のテキストに即して再評価する準備は整えられたといえる。今後は近接する時代の叙述史料を併せて読解し、『実例』の史学史上の意義と位置付けを再検討してゆく予定である。

また上記研究成果の一部に基づき、2018年度 World Congress for Middle Eastern Studies (2018/7/16-22)において口頭発表を行った(“Re-thinking Ibn Khaldūn’s Method of Writing Mashriq History ; An Analysis of Ibn Khaldūn’s Representation of the Abbasid Dynasty in the *Kitab al-‘Ibar*”).

史料調査の環境について

二年間の奨学生期間を通じ、写本史料データ・研究文献収集のためエジプト・トルコの様々な研究機関を訪問した。以下、その調査環境について記す。

* エジプト国立図書館本館および別館マイクロ資料閲覧室(エジプト)

本館では現物の写本史料、別館ではマイクロフィルムを閲覧できる。写本現物の閲覧申請は近年簡略化されたと聞き及んでいたが、パスポート等の他に日本大使館からの紹介状提示を求められ、在エジプト日本大使館文化部にも同時に通う必要が生じた。複写申請から受領までには二週間から一か月を要した。また2018年1月以降、複写料金の大幅値上げと複写制限(一日当たり三〇葉)が実施されたため、

(必要性の高い史料はおおよそ閲覧を終えていたが)それ以降の調査は別機関を優先した。所蔵の『実例』写本はオスマン帝国期のものが中心であるが、1857年に初めて「序説」が、続く1867年に『実例』全体が刊行された際の底本が所蔵されている(但し、どの写本が底本であるかは再検討の余地があると思われる)。

* アズハル図書館 (エジプト)

Ta'rikh Abāza 6729、Ta'rikh 134829 及び 134832 を閲覧し、その全ての画像データを取得した。複写申請時には研究機関からの紹介状を求められ、日本学術振興会カイロセンターから取得した紹介状を提示した。閲覧・複写ともに制限はないが、申請から受領には三週間程度を要した。

* スレイマニエ図書館 (トルコ)

Damad Ibrahim Paşa 写本をはじめ、多数の写本を閲覧・取得した。『実例』の典拠史料として言及される未刊行史料を含めた関連史料も複数所蔵しており、今後も継続して調査を行う必要がある。パスポートのコピーのみで複写申請ができ、申請当日あるいは翌日に受領できるなど手続きもスムーズである。

* トプカプ宮殿博物館付属図書館 (トルコ)

世界記憶遺産に指定される、史料的価値の高い Ahmet III 世コレクションの二写本を所蔵している。事前の利用申請が必要であり、閲覧までに三ヶ月程度を要した。トルコでの滞在期間内に写本全体を閲覧できたが、複写費用が他の施設に比して高額であるため写本全体の画像データ取得には至らなかった。

総じて、エジプトにおける写本史料の利用環境はトルコに比して良くないのが現状である。エジプトは2011年の革命以降も経済状況が好転せず、2016年には変動相場制への移行に伴って通貨価値が下落し、物価は高騰した。国立図書館における複写料金の値上げ実施もその影響の現れであろう。今回の値上げによって料金は前年の三〇倍にもなり、複写制限と併せて利用環境はさらに悪化したと言わざるを得ない。

また刊行史料に関しても、Dār al-Kutub al-‘Ilmīya 社などレバノンの出版物が多くみられ、エジプトの出版物は存外思うように集まらなかった。例年一月に開催されるカイロ国際ブックフェアには国内外から多くの出版社が集まっており、その機会を通じて書籍を購入したが、出版年の古い刊行史料は十分には収集できなかった。

3. 語学習得

滞在開始からおよそ一年弱にわたり、ヌーン校(語学学校)の支配人兼講師であるムハンマド・シャウキー氏よりアラビア語の講義を受講した。同校には日中韓の留学生が多く登録しており、授業料が比較的安価で評価も高く、日本学術振興会カイロセンター所長深見奈緒子氏より紹介を受けた。

アラビア語会話の基本的なレクチャーを受けた後、古典史料の読解にしばしば必要となるアラブ詩の韻律について講義を受けた。また詩を含む幾つかの史料を実際に講読した。

総括

二年間の大半は、写本史料を中心とした文献収集とその読解に費やされた。調査の進捗は概ね順調であるが、文献の量自体が多いため、今後も継続的に調査を行う必要がある。『実例』内容の読解に関しては、全体の通読を終えてイブン・ハルドゥーンの歴史観を検証し、史学史と思想史の全体的な流れと関連付けて再検証する段階に到達した。その作業に使用する関連文献についても、大半は収集を終えることができた。

留学中の生活・研究でのトピックス

筆者が現地滞在を開始した 2016 年は、2011 年革命後に成立したムルシー政権が倒れ、現在のスィーサー政権が成立して三年目に当たる。現政権は治安改善と経済政策に取り組んでいるが、依然として経済状況は芳しくない。筆者の研究テーマは中世史であるため現在の政治状況に左右されることは比較的少ないものの、生活面での影響は避けられなかった。

交通機関や物価の相次ぐ値上げに対する不満はしばしば身近に感じていた。例えば、国立図書館別館の職員 A 氏はいつも政治的話題を口にしていた。ある日の会話。A「君は今日どうやってここまで来たか」私「地下鉄」A「いくらかった」私「二ポンド」A「そう、あの大統領が値上げをしたせいだ！」地下鉄運賃は元々二ポンドであった。現在ではさらに上がって三ポンドからとなっている。

また、2016 年の 11 月 11 日には大規模な反政府デモが行われるとの噂が立った。その前日に閲覧室を訪問した筆者と A との会話。A「明日は何の日か知っているか」私「??？」A「明日は皆で革命に行くんだ！」実際には小規模な抗議集会に終わったらしいが、彼は国営施設の館内にもかかわらずはっきり「革命 thawra」と口にした。革命後の高揚と先行き不安な現状の狭間に生きる複雑な心情が窺えた。

また革命は、筆者の身にもより切実な形で影響をもたらした。それは、2011 年革命の後、エジプトに留学する日本人学生がほぼ途絶えていた数年間に、政府機関や受入先等の状況が一変していたことである。エジプト留学経験者から事前に得ていた情報は一切用をなさず、全てが手探りの状態から始まったため、多くの場面において多大な困難を伴った。他にもエジプトでは、事前に何の告知もなしに必要な書類や手続き場所が変わる、日によって書類が必要だったり不要だったりするなどの不思議な事象にもしばしば対応しなければならなかった。こうした場面においては、在埃日本人や訪問研究者との情報交換が不可欠であったし、日本語を操るエジプト人の助力にも与った。二年間の滞在中には多くの人々に支えられた。また滞在中の衣食住にかんしては、松下幸之助記念財団の助成に全面的に支えて頂いた。最後に、この場を借りて厚く御礼申し上げる。

今後の社会貢献

今後まず達成すべき目標は、博士論文の完成とその公表を通じてイブン・ハルドゥーン研究の成果を発信してゆくことである。

また現代における大きな政治的変動を目の当たりにするなかで、筆者はイブン・ハルドゥーン研究の現代的意義にも思いを巡らせてきた。西洋と非西洋における近年の動向をみて強く感じることは、欧米圏の研究者がイブン・ハルドゥーンをあくまで「近代西洋に比肩する過去の学者」として扱う傾向にあるのに対し、イスラーム圏におけるイブン・ハルドゥーンという存在は単なる過去の偉人に留まらないのだろう、ということである。例えばある研究者はサミュエル・ハンチントンの「文明の衝突」テーゼに反論して、ムスリムによるイスラーム文明の自画像の語り手としてイブン・ハルドゥーンを選択した。他にも Sayyid F. Aratas らの提唱するハルドゥーン社会学のように、彼の理論を積極的に適用してゆく動きも見られる。イブン・ハルドゥーンという存在がいかに表象され、人々が彼を通じて何を語るかをみることで、今日のイスラーム圏における思想状況を読み解く上で一つの大きな手がかりを示せると筆者は考えている。

写真①アズハル図書館調査後 向かいの歩道橋から死者の町を望む



写真②トルコ:トプカプ宮殿図書館調査訪問 門の前



写真③マムルーク朝軍人ウルジャーイー・ユースフィーのマドラサ

